

る。遼の5京の中には純支那思想に基いて、都市の中心に宮闕を置いたらしいものもあるが、中には東京遼陽府城のやうに宮城が東北隅にある例もある。次の金に至つても上京會寧府は宮城が西南隅に置かれた。その傾向は大都の近くの金の中都大興府城にもあつたかのやうである。斯く宮闕を都城の隅のやうな甚しく偏した所に置き、少しも支那古來の首都制に拘泥しない風潮が、大都の計畫の場合にも背景をなしたものと考へてよいかと思ふ。是を成因の第1と推定したい。

第2に考へるのは蒙古に於ける支配者階級の天幕（正確に言へば穹廬・氈帳）群の配置法である。皇帝又は王の行宮・陣營を蒙古語で斡耳朵(Ordo)といふが、それは皇帝又は王の天幕のみでなく、扈從者その他の者の多数の天幕が群がるから、1つの移動式首都と見ることが出来る。斡耳朵の配置は Volga 河畔の拔都(Batu)大王の例を見ると、大王の天幕が南面して立てられ、その左右に蜿蜒と妻妾臣下達の天幕が並び、大王の

天幕の前には一切天幕を置くことは許されなかつた。これは大都の平面に似てゐると思ふ。同じ配置法は今の内蒙地方にあつたのみならず、現在も尙ほ小規模ながら王府に於て認められる。斯る移動式首都の配置法が固定的首都に採用されることは蒙古人の慣習上に便利であるから、極めて自然に生ずる可能性が多いと思ふ。これを成因の第2としたい。

大都の建設に當つては技術者的見識を持つ劉秉忠が居た。彼はこれより早く元の上都を建設した。上都は宮城が都城の真ん中にある形式に近い。その秉忠がまた關係してゐるにも拘らず、遼金の傾向をうけつぎ、更に斡耳朵の制を採り入れた首都が計畫されたのは何故であらうか？その點を説明するものとして主腦技術者に大食人の也黒迭兒(又は亦黒迭兒丁)が居たことを注意すべきである。これを或は成因の第3と見てもよいかも知れない。

南臺灣に於ける高砂族住家の研究

正員 千々岩 助太郎¹⁾

抑々高砂族といふ名稱は臺灣の原住民族を指しこれを7種族に分ち昭和10年末現在に於ける戸數及び人口は次の通りである。

タイヤル族	7,370戸	35,639人
サイセツト族	257	1,482
ブヌン族	1,965	17,757
ツオウ族	346	2,168
パイワン族	8,373	43,460



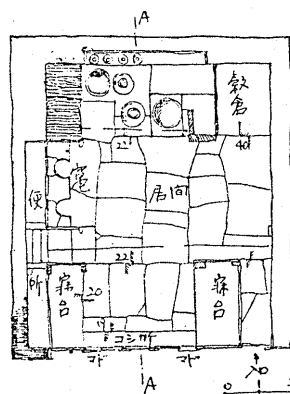
第1圖 パイワン族住家實例の1

アミ族	5,939	48,237
ヤミ族	397	1,695
計	24,651	150,502

本論文は筆者が目下行ひつゝある高砂族住家研究の一部であつて地理的にこれを南北に分ち、今回發表するのはパイワン族、ブヌン族及びツオウ族の住家である。因より未開民族の住家でその手法等甚だ幼稚ではあるが古來のものをそのまま繼承したもの多く種族に依つて趣を異にしてゐるのは勿論であるが、同種族のものにも亦地方に依つて幾多の相違がある。

1. パイワン族の住家

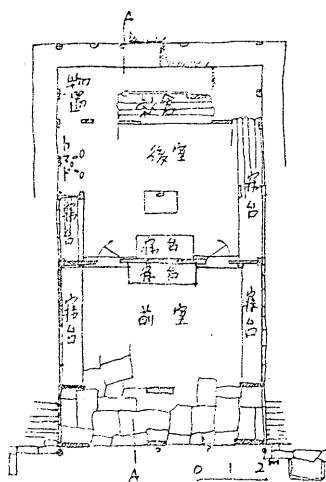
パイワン族は高雄州及び臺東廳の南部に居住しその住家は地方に依つて次の5形式がある。



- ① パイワン族北部地方の住家(附圖1,2)
- ② スポン社・ナイブン社地方の住家(附圖2,3)
- ③ 牡丹社・クスクス社地方の住家
- ④ チョカクライ社・タバカス社地方の住家
- ⑤ 大麻里社地方の住家

第2圖 パイワン族住家實例の2

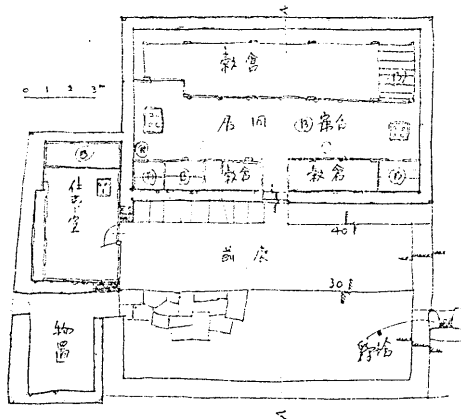
1) 臺北工業學校教諭



第 3 圖 パイワン族住家實例の 3



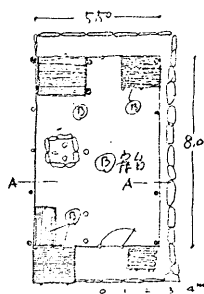
第 4 圖 パイワン族住家實例の 4



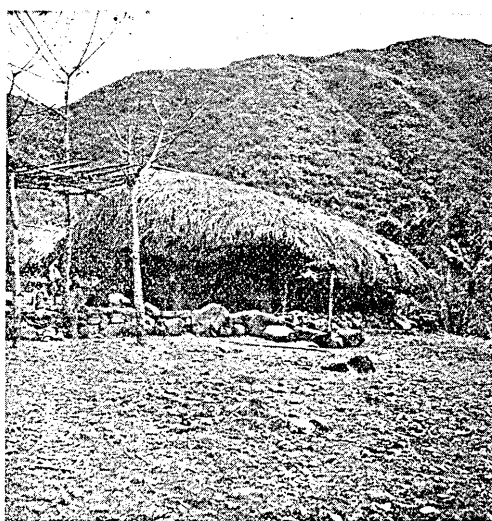
第 5 圖 ブヌン族住家實例の 1



第 6 圖 ブヌン族住家實例の 2



第 7 圖 ツォウ族住家實例の 1



第 8 圖 ツォウ族住家實例の 2

2. ブヌン族の住家

ブヌン族は新高山を中心として臺中州の南部及び臺東廳の北部の山岳地帯に居住してゐるが、その住家は各地方とも殆んど一定し構造材料が地方に依つて異なるのみである。(附圖 5, 6)

3. ツォウ族の住家

ツォウ族は臺南州阿里山地方及び高雄州の北部に居住し、その住家は殆んど各地方一定してゐる。(附圖 7, 8)